

「柏崎の水」

吉井 おかめが井戸

古くから柏崎では正月に天神様を祀る習慣があった。木彫や掛軸の天神像を床の間に飾り、御神酒や餅を供えるなどして正月を迎えるのである。吉井でも、元旦から1月25日まで天神様を祀る。また吉井・西ヶ峯の天神社は、長い歴史を持つこの地域の産土神である。西ヶ峯には天神社の御手洗水だったと伝わる「おかめが井戸」が現在でも清水を湛えている。

おかめが井戸は、天神社の「お神の井戸」と呼ばれたことが名前の由来だといわれるが、その他にも諸説あり、「中通村史」では次のふたつの説も記されている。

- ・矢田に「おかめ」という女がいて、この清水を鏡代わりにして身だしなみを整え男達のもとへ遊びに出掛けていた。このため、いつのまにか「おかめが井戸」と呼ばれるようになった。
- ・源義経が奥州へ下る途中、この近くで休憩した。義経が水を所望したところ、家来の亀井六郎がこの清水を発見したので「亀井が井戸」と呼ばれた。これが「おかめが井戸」に変わった。



おかめが井戸

「吉井風土記」によれば、昭和31年の土地改良事業の際、井戸に新たに水溜が設けられ、傍らにおかめを偲ぶ人々により碑が建てられた。現在その碑は茂みにすっぽりと覆われ判読は難しいが、「おかめが井戸」と刻まれているという。井戸は天神社から約100m離れた農道の道端にあるが、来訪者にわかりやすいよう、地元の方手作りの案内表示が設置されている。また大正時代に著された「柏崎文庫」では

テンテラテンの天神が森に流れ出た清水
矢田のおかめの化粧の水

という相撲甚句が紹介されているなど、この井戸が昔から人々に親しまれていたことがわかる。

西ヶ峯には縄文～中世の時代の遺跡が存在し、この地に早くから人々が生活していたことを物語っている。当時の人も、この清水で喉を潤したのだろうか。

参考にした本

「吉井風土記」新田昌文 著(224 ㇿ)

「中通村誌」中通村 編(224 ㇿ)

「柏崎文庫」関甲子次郎 著(080 ㇿ)

「刈羽郡誌」関矢貞作 著(224 ㇿ)

「神社明細帳」新潟県神社庁柏崎支部 発行(170 Nㇿ)